



Title	”タ”の表す「発見」について
Author(s)	徐, 雨蓁
Citation	日本語・日本文化. 2008, 34, p. 23-40
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4387">https://doi.org/10.18910/4387</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

## “タ”の表す「発見」について

徐 雨菜

### 1. 問題提起

日本語では、通常「過去」の事態ならば、“タ”形で発話する。しかしながら、実際に観察してみると、この規則に反した発話が「発見」の状況において、しばしば見られる。

(1) (探し物を見つけたときに) あっ、あった。

例えば(1)のように、探し物を発見した際に、探し物が目の前にあるにもかかわらず、「あっ、あった」というように“タ”形で発話することが多い。この種の“タ”形表現<sup>1)</sup>については、従来の指摘により、大きく三つの立場に分かれる。それは、「ムードの“タ”」と考える立場(寺村1971,1984など)、「テンスの“タ”」と考える立場(金水1998,2000,岩崎2000,井上2001,2002など)、「アスペクトの“タ”」と考える立場(岡野1999など)である。寺村説が“タ”自体をムード形式と認めるとしている点に矛盾を感じたため、本稿は、岩崎(2000)の指摘と同様に「ムードの“タ”」と考える立場に賛同していない<sup>2)</sup>。なぜなら、「ムードの“タ”」というような説明を1990年代以後に言及された「モダリティの体系」から考えると、問題があるためである。「モダリティ」は「命題の内容に関わる話者の捉え方を表す対事的モダリティ」と「聞き手に対する話者の態度を表す対人的モダリティ」に分かれる。これに対し、寺村で主張した“タ”の「ムード」は、「話し手の『時に関わる心象』」である。つまり、それは「対事的モダリティ」ではなく、また「対人的モダリティ」でもないと言えるだろう。従って、「ムードの“タ”」を、現在の「モダリティの体系」内に位置付けるのは議論の余地があろう。

以下では、「テンスの“タ”」及び「アスペクトの“タ”」という立場における先行研究を挙げ、問題点を取り上げる。また、説明の便宜上、「発見」の状況に用いられる“タ”形表現を「発見の“タ”」と記述することにする。

### 1.1 井上優(2001、2002)とその問題点

井上(2001)では、「発見の“タ”」は、「発話時直前において観察された状態pを、発話時における同一状態pから切り離して独立に叙述することにより、発話時直前に観察行為があったことを暗示する表現である」と述べている(p.145)。また、井上(2002:128)は、上記とほぼ同じような指摘(=「判明時に観察された状態の単純叙述」)であり、以下の例を挙げている。

- (2) (電話帳で井上の名前を探している)

えーと、井上、井上…。あった(=ここを見たらあった)。(井上2002)

- (3) (探しても見つからなかった傘が予想外の場所で偶然見つかった)

あ、ここにあった(=よく見たらここにあった)。(同上)

さらに、三上(1953)と寺村(1984)の分析に従い、「発見の“タ”」が使用される背景(つまり、井上2001、2002の言う「観察行為がなされる背景」)は、「何らかの予想や問題意識があることが多い」ものであると述べている。例えば、次の例のように偶然に発見した場合、“タ”形ではなく“ル”形が用いられると説明している。

- (4) (誰のものかわからない財布が落ちているのが偶然目に入って)

a. あれ?こんなところに財布が落ちている。(どういふこと?)

b. ??あれ?こんなところに財布が落ちていた。(井上2001:145)

上述の井上説をまとめると、予想や問題意識を含む観察行為のもとで「発話時直前に観察された状態の叙述」を行う場合、“タ”形による発話が行われるはずである。この説明は、(5)のように“タ”形表現しか許されない用例について説明可能であると思われる。

- (5) (自分の携帯電話のアドレス帳で夫の電話番号を探していたとき)

a. あった!

b. \*ある!

しかし、次の例のように、“ル”形でも発話可能である状況が存在すること

から、井上説で主張されている『「判明時に観察された状態の単純叙述』にもとづく過去形の使用」が、「発見の“タ”」の使用に対する的確な説明とはならないのではないだろうか。

(6) (友人Aの電話番号が夫の携帯電話に登録されているか勝手に調べたとき)

a. あった!

b. ある!

(6) のような観察行為を含む発話状況において、もしaの「あった」という発話を、井上説である「発話時直前に観察された状態の叙述」に基づくものとする、説明に無理があるように思われる。なぜなら、bの「ある」という発話も、「“たった今” 観察した」という「発話時直前に観察された状態の叙述 (つまり、見たらここにある)」であり、「あった」と「ある」の使用条件に区別がつかないからである。

以上のことから、本稿では井上説には賛同していない。

## 1.2 岡野ひさの (1999) とその問題点

前述のような「テンスの“タ”」と考える立場に対して、アスペクトの一種だと捉える説明がある。尾上 (1982) の『「確言」という分類』を受け継ぐものとして、たとえば岡野 (1999) は、人間の意識の面から考察し、「発見の“タ”」を「判明の“タ”」と名付け、「意識内で『変化が起きたこと』を表す」と述べている (p.6)。また「焦点意識に対する結果が判明し、それを認識した」時に現れるとしている。即ち、「ある事柄を意識すれば、つまりある事柄に意識を集中すれば、タ形が現れる可能性がでてくる」としているのである (p.3)。この種の“タ”は認知的完了 (a Cognitive Present Perfect Tense) を表し、広義のアスペクトの範疇に見られる用法であるとも言及している。

もし「発見の“タ”」の使用条件を「意識内で変化が起きたこと」と規定すれば、上記の (5) (6) のような“タ”形の使用に対して説明を与えているように思えるが、この2例における“ル”形の適格性の相違に対する説明としては明確でないと考えられる。つまり、「発見」の状況において、“タ”形のみ用いられる場合や、“タ”形・“ル”形両方とも用いられる場合がなぜ存在するのかについての説明がないのである。それを明らかにしない限り、“タ”

形表現が用いられる条件について明らかにしているとは言い難いと思われる。形式から言えば、「ある」という“ル”形の発話が成立するか否かで、この二つの状況に用いられる「あった」という“タ”形の発話が生成する条件は異なると考えられる。

### 1.3 金水敏(1998、2000)とその課題

金水(1998)は、寺村(1984)の分析に従い、「発見」の状況に用いられる“タ”形表現を「現時点と関与的な過去のある時点」が存在するか否かで、「〈期待の実現〉(例7)」と「〈発見〉(例8)」の二種類に分類している(pp.173-174、180)。

- (7) (学校を出て、帰りかけて、傘を忘れたことに気づいてひきかえす。教室のすみをみると、期待どおりある、その場合)

あ、あった (金水 1998:173)

- (8) この男は、ほかにも妙な癖がある。自分の持っている銭を、人の知らない間に石崖の穴かどこかに隠しておいて、

「おや、ここに銭があった。こいつで一ぱい飲もう」と云って人に御馳走する癖がある。 (同上)

そして、後者の〈発見〉に用いられる“タ”の意味をテンスと捉えたとしながら、「ものぐさなパーフェクト」ともし、『あるのを見つけた』が『あった』になった」と記述している(金水 1998:182)<sup>3)</sup>。これに対し、金水(2000)においては、前者の〈期待の実現〉に用いられる“タ”の意味が、「視点が情報がない段階から情報がある段階へと移行した直後にある」ところから、「パーフェクト相的な“タ”」という側面をも有すると論じている(p.65)。その際、以下の例を挙げている。

- (9) (コンタクトレンズを探していて、やっと見つけて)

あ、あったあった。 (金水 2000:65)

「発見(つまり〈期待の実現〉と〈発見〉)」の状況に用いられる“タ”は、「時制性に関わる場合だけでなく、アスペクト性にも関わる(金水 2000:65)」のである。

金水の指摘は「発見の“タ”」を分析するのに際し念頭におくべき論点であると評価できる。しかし、この指摘によると、“タ”形を用いる際に、どのよ

うな発話状況において「テンス性に関わる側面」または「アスペクト性に関わる側面」がその使用の決定的な条件となるか、ということはい及されてない。そして、本稿では、上述の二つの側面のどちらかが使用上の決定的な条件であることが「“タ”形しか発話できない状況」と「“タ”形でも“ル”形でも発話できる状況」という二つの状況を作り出している理由だと考えている。

(10) (自分の携帯電話のアドレス帳で夫の電話番号を探していたとき)

a. あった!

b. \*ある! (= (5))

(11) (友人Aの電話番号が夫の携帯電話に登録されているか勝手に調べたとき)

a. あった!

b. ある! (= (6))

両方とも「他人の電話番号を探す」という観点から、類似した発話状況であるが、本稿では、bの「ある」という発話が成立するか否かで、(10a) (11a)の「あった」という“タ”形の生成条件が異なり、「テンス性に関わる側面」と「アスペクト性に関わる側面」とを分析する必要があると考える<sup>4)</sup>。

#### 1.4 「認識時」と「発見の“タ”」の使用との関係

テンス説の立場をとる研究では、[何々が何処々にある]という事態に対する認識時が「過去」にあったため、事態が過去からのものと言える。そのため、「発見の“タ”」は「過去の“タ”」であると説明されている<sup>5)</sup>。

(12) (友人Aの電話番号が夫の携帯電話に登録されているか勝手に調べたとき)

a. あった!

b. ある! (= (6))

(13) (合格発表の日、掲示板で自分の受験番号を探して)

a. あった!

b. ある!

しかし、(12) (13)のような発話状況においては、「電話番号が夫の携帯電話にある」「受験番号が掲示板にある」という事態が以前からあったとしても、話者はその番号の存在について確信を持っていない場合、つまり「事態の認識時点が過去にあった」という条件が当てはまらない場合にもかかわらず、依然として

“タ”形を用いて発話することができる。このことから、「発見の“タ”」の使用は必ずしもテンス的な要因(=「事態の認識時点が過去にあった」)のみによるとは限らないことがわかる。

### 1.5 「発見のニュアンス」の由来

次の例のように、“タ”形で発話されると、探し物を見つけたというニュアンス(本稿では「発見のニュアンス」と記す)がなぜ“ル”形より強く生じるのか。

(14) (合格発表の日、掲示板で自分の受験番号を探して)

a. あった!

b. ある! (= (13))

このことについて、テンス説の立場をとる研究では、「発見の“タ”」は、〈発話時以前〉の状態であることを表すだけで、「発見」の意味は、「当該の状態を過去のある時点にさかのぼって把握することから付随的に生じる(井上2001:137)」としている<sup>6)</sup>が、「付随的」という用語では、どのようなプロセスによって「発見のニュアンス」が生じるのかが不明である。

### 1.6 存在文以外の「発見の“タ”」との関連性

「発見の“タ”」について、先行研究で前提とされる言語事実は、「(何々が何処々に)ある」「(何々が何処々に)いる」という存在文に限定されている。しかし、実際に言語事実を観察すると、存在文以外の「発見」の場合においても“タ”形が用いられる。例えば、

(15) (問題の解決策を考えていたときに)

あっ、(こんな方法が) あった! こうすればいい。

では、探し物を見つけた際に用いる「あった」と、方法を思いついた際に用いる「あった」との類似点はあるのか。つまり、両者の使用条件は同一のものとして考えてよいのか。この点について検討する。

## 2. 「発見」に用いられる“タ”

### 2.1 「発見の“タ”」の使用条件

本稿では、前章で述べたことを踏まえ、「発見の“タ”」の使用条件は、従

来指摘されている「テンスの観点に関わる条件 (= [何々が何処々にある] という事態の認識時点が過去にあったこと)<sup>7)</sup>のみならず、「事態把握の観点に関わる条件 (= ある事態が確実に出現したと話者が認定したこと)」にも関係すると考え、論を進める<sup>8)</sup>。

では、この場合の「事態把握の観点に関わる条件」の内実は具体的に何だろうか。ここで主張した「事態把握の観点に関わる条件」は、金水 (1998, 2000) が指摘した「アスペクト性に関わる側面」から生じるものである。前述のように、金水は、「発見の“タ”」を「パーフェクト相的なもの」とし、『あるのを見つけた』が『あった』になったと示している。また岡野 (1999:6) も同様に、この種の“タ”の用法を「見つけた」の省略表現であると述べている。これらの説明では、「発見の“タ”」形表現に「あるのを見つけていない」という状態から「あるのを見つけた」という状態への過程を主張しており、本稿でも賛同している。そしてそこから、「あるのがわかっていない」という状態から「あるのがわかった」という状態への変化過程を誘発すると考えられる。つまり、「(何々が何処々に) あるのを見つけた」瞬間に「(何々が何処々に) あるのがわかった」という状況が話者の頭の中で生じたのである。この場合、「探し物を見つけた」という行為が[“(何々が何処々に) あるのがわかる” という事になった]という「事態の出現」のスイッチになったと考えてもよいだろう。即ち、「(何々が何処々に) あるのがわかる」という事態が出現したと話者が認知すれば、“タ”形の使用が可能になるのである<sup>9)</sup>。

また、[“(何々が何処々に) あるのがわかる” という事になった]となる前提としては、「何処々に (何々が) あるかな」といった「何らかの予想や前提となる意識」の存在がなければならないと思われる。つまり、「何らかの予想や前提となる意識」がなければ「(何々が何処々に) あるのを見つけていない = あるのがわかっていない」という状況が存在せず、「(何々が何処々に) あるのを見つけた = あるのがわかった」という状況への変化が起こらないため“タ”形の使用が不可であると考えられる<sup>10)</sup>。

以上のことから、「(何々が何処々に) あった」のような存在文に限定される「発見の“タ”」の使用条件について下記のように主張する。

■ 存在文に限定される「発見の“タ”」の使用条件：

a. テンスの観点に関わる条件：

ある事態の認識時点が過去にあったこと。つまり、[何々が何処々にある]  
という事態の認識時点が過去にあったこと。

b. 事態把握の観点に関わる条件：

ある事態が確実に出現したと話者が認定したこと。つまり、[(何々が何  
処々に) あるのがわかる] という事態が出現したと話者が捉えたこと。

本稿は、「発見の“タ”」を考察する際に、「テンスの観点に関わる条件」と「事  
態把握の観点に関わる条件」(=[“(何々が何処々に) あるのがわかる” という  
ことになった]と話者が捉えたこと)を複合的に考える。もし複合的に考慮しな  
ければ、なぜ発話状況によって“タ”形(あるいは“ル”形)だけが適格で  
あるか、あるいは“タ”形・“ル”形両方とも適格であるかということをも説  
明できない。そして、“タ”形の使用から生じる表現効果(再確認、事前の想  
定の訂正、事前の想定<sup>11)</sup>の補強)を包括的に説明できないと思われる<sup>11)</sup>。

■ 「発見」とされる言語事実

① “ル”形のみ用いられる場合 (2.2節)

② “タ”形のみ用いられる場合 (2.3節)

③ “ル”形と“タ”形両方とも用いられる場合 (2.4節)

以下、“タ”形・“ル”形の適格性について、先行研究で挙げられた言語  
事実を上記のように分類し、「ある」という動詞の例を中心に検討していく。

2.2 “ル”形のみ用いられる場合

(16) (道端で偶然一万円札を発見した場合)

a. \*あれっ、一万円札があった!

b. あれっ、一万円札がある!<sup>12)</sup>

(16)は、一万円札が道端に落ちていることを予想して探している状況ではなく、  
本稿で提案した「何らかの予想や前提となる意識」の存在がない。従って、前述  
した「発見の“タ”」の使用条件の「事態把握の観点に関わる条件」には当て  
はまらない(もちろん「テンスの観点に関わる条件」にも当てはまらない)。そ  
のため、“タ”形が用いられない。もし「一万円札があった!」というように

“タ”形を用いて発話すると、道端に一万円札があると予測しながら道を歩いているというニュアンスが付与されることになり、この発話状況は事実と反している。

偶然に発見した場合には通例、“ル”形でしか発話されないと考えられる<sup>13)</sup>。

### 2.3 “タ”形のみ用いられる場合

以下、「テンスの観点に関わる条件」が“タ”形の使用条件である場合について考察する。この場合、“ル”形は用いられない。

(17) (自分の携帯電話のアドレス帳で夫の電話番号を探していたとき)

a. あった!

b. \*ある! (= (5))

(17) は、話者が「夫の電話番号が自分の携帯電話に登録されている」ということを事前知っていた状況である。そのため、電話番号が眼前にあるにも関わらず、「テンスの観点に関わる条件 (= ある事態の認識時点が過去にあったこと)」が働いたため、“タ”形を用いている。

“ル”形の使用が不可であるのは、夫の電話番号を自分の携帯電話に登録しているということを知っている、つまり、「夫の電話番号が自分の携帯電話にある」という事態を過去から認識しているためである。

このことから、「テンスの観点に関わる条件」が“タ”形使用の必須条件となっている。裏返せば、「テンスの観点に関わる条件」が“タ”形使用の必須条件となると、“ル”形の使用が不可になる。

また、「事態把握の観点に関わる条件」から見ると、電話番号を見つけた際に、[“(電話番号がアドレス帳に)あるのがわかる”ということになった]と話者が捉えたため、“タ”形で発話したとも考えられる。このような場合、「テンスの観点に関わる条件」と「事態把握の観点に関わる条件」を組み合わせれば、過去のある事態についてその記憶を呼び起こし、そこから生じる表現効果 (= 再確認) が得られることが明らかになる。

以下に他の用例を挙げる。

(18) (旅行中、ガイドブックに載っていた店を探していて、見つけたときに)

a. あった!

b. \*ある!

この例は、その店に行ったことがなく、場所をよく知らない状況である。この場合、“タ”形しか用いられないのは、「(ガイドブックを読んで)店がこの辺にある」という事態を〈発話時以前〉から認識していることが前景化されているからである<sup>14)</sup>。(17)では、話者が事態を直接認識しているが、(18)の場合は、事態をガイドブックを通して間接に認識している状況での発話例である。

## 2.4 “ル”形と“タ”形両方とも用いられる場合

次に、「事態把握の観点に関わる条件」が“タ”形の使用条件である場合について考察する。この場合は、“ル”形と“タ”形両方とも用いられる。

(19) (へそくりを探していたが見つからず、探すのを諦めた後で偶然たんすの中から見つけた場合)

a. こんなところにあった!

b. こんなところにある!

(19)は、話者が「へそくりがたんすの中にある」ということを知らなかった状況である<sup>15)</sup>。つまり、この場合は「へそくりがたんすの中にある」という事態の成立時点は「過去」であっても、話者がそのことを忘れて認識していないため、「テンスの観点に関わる条件」は成立していないと考えられる。従って、“ル”形を用いた発話が可能である<sup>16)</sup>。

また、「テンスの観点に関わる条件」が働いてないため、「事態把握の観点に関わる条件」が“タ”形使用の必須条件になることが伺える。即ち、へそくりを見つけた際に、「“(へそくりがたんすの中に)あるのがわかる”ということになった」と話者が捉えたため、“タ”形が用いられているのである。

話者がたんすの中にないだろうと想定していた場合には、事前の想定事態と眼前の事態が異なっていることに話者が気づいて、“タ”形を用いることによって、事前の想定を訂正するという表現効果を有する<sup>17)</sup>。

以下に他の用例を挙げる。

(20) (友人Aの電話番号が夫の携帯電話に登録されているか勝手に調べたとき)

a. あった!

b. ある!

(= (6))

(20) は、夫の携帯電話に、友人 A の電話番号が登録されているかどうかははっきりとは知らない状況である。この場合、「事態把握の観点に関わる条件 (必須条件)」の働きによって、“タ”形が使えると考えられる。なぜなら、友人 A の電話番号が夫の携帯電話に登録されているか否かについて話者は確信を持っていないので、「テンスの観点に関わる条件」は十分に働いてないからである。このことは、“ル”形を用いた発話で使用可能の理由と繋がる。そして、事前の確信のない想定と、眼前の事態が想定通りであったことを話者自身が確認した際に、“タ”形を用いることによって、その事前の想定を補強するという表現効果が示されると考えられる<sup>18)</sup>。

では、次の発話状況はどう考えたらよいのか。

(21) (合格発表の日、掲示板で自分の受験番号を探して)

a. あった!

b. ある!

(=(13))

この発話状況は、三通りの話者の心理状況が考えられる。一つ目は「自分の受験番号が必ずあると思っている」、二つ目は「自分の受験番号がないと思っている」、三つ目は「自分の受験番号があるかという自信がない」という状況である。一つ目の場合では、話者が「自分の受験番号が掲示板にある」ということを知っていたため、「テンスの観点に関わる条件」が成立している。従って、b の“ル”形表現は用いられず、“タ”形表現で発話される<sup>19)</sup>。二つ目の場合と三つ目の場合は、“タ”形と“ル”形両方とも使用可能である。これらの場合においては、「自分の受験番号が掲示板にあることを知っている」という前提がないから、「テンスの観点に関わる条件」が働かない。そのため、「事態把握の観点に関わる条件」が“タ”形表現の使用条件であると考ええる。

## 2.5 存在文以外の「発見の“タ”」との関連性

下例のように、解決策を思いついた際に用いる「あった」の使用条件は探し物を見つけた際に用いる「あった」と同一のものと考えられるのだろうか。

(22) 甲：〇〇から××まで、あまり歩かずに行く方法はありませんか？

乙：ちょっと待って。考えさせて。あっ、(こんな方法が) あった! こうすればいい。

(22) の場合は、「ちょっと考えた後で、よい方法を思いついた」のである。即ち、「方法を思いついた」、言い換えれば[“方法があるのがわかる”ということになった]と話者が捉えたため、“タ”形が使われたのである<sup>20)</sup>。

以上のことから、解決策を思いついた際に用いる「あった」の使用は、「事態把握の観点に関わる条件」によるものである。

## 2.6 「発見のニュアンス」の由来

「発見のニュアンス」は、「事態把握の観点に関わる条件」、つまり「[“あるのがわかる”ということになった]と話者が捉えたこと」から生まれるものである。

存在文の場合において、「何々が何処々にある」という事態が話者の認知環境の中に出現し、話者は知覚を通して話者自身の既存知識を更新している。「発見のニュアンス」は、知覚を通して、[(何々が何処々に) あるのがわかった]という事態の出現が確実であると話者が認定し、デフォルト知識(=あるのがわかっていない)を更新することによって誘発されるものである。

存在文以外の場合(例22)において、「発見のニュアンス」が生じるのは、[方法があるのがわかる]という事態が出現したと話者が認定する際に、それと同時に話者自身のデフォルト知識も更新されるからである。

## 3. まとめ

本稿では、「(何々が何処々に) あった」のような存在文に限定される「発見の“タ”」の使用条件には、「テンスの観点に関わる条件」と「事態把握の観点に関わる条件」があると主張した。「テンスの観点に関わる条件」とは「ある事態の認識時点が過去にあったこと」であり、つまり、「[何々が何処々にある]という事態の認識時点が過去にあった」ということである。これは、従来の説と同義である。一方、「事態把握の観点に関わる条件」とは、「ある事態が確実に出現したと話者が認定したこと」であり、即ち「[(何々が何処々に) あるのがわかる]という事態が出現したと話者が捉えた」ということである。そして、「何らかの予想や前提となる意識」の存在が、「テンスの観点に関わる条件」と「事態把握の観点に関わる条件」による“タ”形使用の制約である。また、発話背景によ

て“タ”形の使用条件が異なり、その際“ル”形の使用が適格であるか否か  
が変化する。即ち、以下のようにまとめることができる。

■ 「発見」とされる言語事実

a. “ル”形のみ用いられる場合

(潜在的な期待を有しない) 偶然の発見の状況は、「テンスの観点に関わ  
る条件」も「事態把握の観点に関わる条件」も共に働かず、“ル”形  
だけが使われる。

b. “タ”形のみ用いられる場合

[何々が何処々にある]という事態について事前の認識がある場合は、「テ  
ンスの観点に関わる条件」が働いて、“タ”形だけが使われる。

c. “ル”形と“タ”形両方とも用いられる場合

[何々が何処々にある]という事態について事前の認識がない場合(潜  
在的な期待を有する、偶然の発見の状況を含む)は「テンスの観点に関  
わる条件」が働かず、「事態把握の観点に関わる条件」が働いて、“ル”  
形と“タ”形の両方が使われる。

一方、存在文以外の場合は「思いついた」つまり「[方法があるのがわかる]  
という事態が出現したと話者が捉えた」ので、「事態把握の観点に関わる条件」  
が働いて“タ”形が使われる。

また、「発見のニュアンス」の生成過程も以下のようにまとめる。

■ 「発見のニュアンス」の生成過程

I 存在文の場合：

存在文の場合においては、知覚を通して、[(何々が何処々に) あるのが  
わかった]という事態の出現が確実であると話者が認定し、デフォルト  
知識(=あるのがわかっていない)を更新する。そして、このことによ  
って「発見のニュアンス」が誘発されるものである。

II 存在文以外の場合：

存在文以外の場合においては、[方法があるのがわかる]という事態が  
出現したと話者が認定する際に、同時に話者自身のデフォルト知識が更  
新される。そして、このことにより、「発見のニュアンス」が生まれる。

## 註

- 1) 寺村(1984)では、「発見」の状況に用いられる“タ”形表現が状態性述語に限られると指摘している。状態性述語の特徴は、ある状態が変動なしに続くことであり、つまり過去の状態が現在も続いているということを表す。
- 2) 岩崎(2000:5)では、「仁田(一九九一)はモダリティを文法カテゴリーとして位置づけているが、他にも益岡(一九九一)など、モダリティを体系化している」という研究が進んだ一九九〇年代を経て、今やいわゆる『ムードのタ』のみを『過去のタ』とは別に、モダリティの体系内に位置づけるというのは無理であろう」とし、『『モーダルな意味』は認めても、『タ』自体をモダリティ形式と認めることはもはやできない』と指摘している。本稿はこの指摘に賛同する立場をとる。
- 3) 例8は「おや、ここに銭がある。こいつで一ぱい飲もう」と“ル”形で表現することもできる(寺村1984、金水1998)。“ル”形表現と“タ”形表現のニュアンスであるが、金水(1998)では、「ル形の表現は、単に目前に対象が存在することを述べるに過ぎないが、タ形を用いると、今まさに『見つけた』という気持ちが表されるようである」と説明している(pp.180-181)。
- 4) この点は第2章で詳しく論じる。
- 5) たとえば、テンス説と考える立場に立つ定延(2001、2004)の「情報のアクセスポイント」という説明では、「発見の“タ”」は「[何々が何処々にある]という命題(=事態)を体験した時点が過去であることを表す、ということである。
- 6) 上記の説明は、金水(1998:179)の解釈である。金水は次のように述べている。発話時Sに知られた状態pが、過去のある時点Rから成立している事を述べるために、新たにRにpを登録した場合、「ムードの「タ」」の意味が生じる。
- 7) 金水(1998、2000)、井上(2001、2002)、定延(2001、2004)等参照。
- 8) 本稿では、文末の“タ”の規定において「テンスの観点に関わる条件(=事態の成立時点または事態と関連づけられる何らかの時点が過去にあったこと)」と「事態把握の観点に関わる条件(=ある事態が確実に出現したと話者が認定したこと)」を複合的に考える。これについては、徐(2007): <http://cjtl.doshisha.ac.jp/data/10-xuyufen.pdf> (中日理論言語学研究会ホームページ) 参照。以下、その内容を簡単に紹介する。
  - ① (試合時間が残り僅かな状況で、ブラジルが4点目のゴールを入れたのを見て) ああ、これで日本はもう負けたな。
  - ② (毒を飲ませて、相手の苦しんでいる姿を見て) これでお前は、もう死んだな。
 上記のような「見通しと関わる“タ”形表現、つまり未実現事態に用いられる“タ”形表現」は「事態の実現に対する強い確信」、即ち事態の実現を確実なも

のと話者が捉えたというニュアンスを有し、その表現に用いられる動詞は telic な動詞に偏っていた。この種の動詞は「“……タ” という状態になってはじめて運動が達成され、そこから、結果状態が出現したと見なされる」ものと考えられる。このことを踏まえると、この種の“タ”形表現は「事態の実現を確実なものとして話者が捉えた」という表現効果を有することから逆算して、“タ”は「[“……” という状態になった]と話者が捉えたことを表す」と推察される。たとえば、上記の「これで日本はもう負けたな」や「これでお前は、もう死んだな」においては、話者が「[“日本が負ける” ということになった]」や「[“お前が死ぬ” ということになった]」と思ひ込み、発話している。つまり、話者がその事態の発生を自分の認知レベルで確実に起こったものと判断すれば、“タ”形を用いて発話できるのである。以上のことから、“タ”の条件とは、「[“……” という状態になった]と話者が捉えたこと」である。「[“……” という状態になった]」は「事態が出現した」と表記する。そして、事態把握の観点に関わる“タ”の使用条件とは「ある事態が確実に出現したと話者が認定したこと」である。

- 9) この考えの妥当性については、「あっ」「あ」という間投詞と共に、「あった」という“タ”形を用いた発話がよく使われることから検証できる。即ち、この場合、間投詞「あっ」「あ」は、話者の頭の中で『あるのがわかっていない状態』から『あるのがわかった状態』というような場面の切り替えのきっかけとして使われているのである。ただし、間投詞自体が場面の切り替えの機能を持っているか否か、については断言しない。本稿では、「発見の“タ”」形表現についての考察に焦点を絞り、この問題について扱わないこととする。
- 10) 「何処々に(何々が)あるかな」といった「何らかの予想や前提となる意識」の存在も、いわゆる「テンスの観点に関わる条件」による“タ”形使用を可能にする要件である。
- 11) 「発見の“タ”」の使用により生じる「事前の想定」の訂正や「事前の想定」の補強という表現効果については、井上(2001)も指摘している。
- 12) この場合においては、「あっ、一万円だ!」と発話することもできる。
- 13) 以下は「偶然に発見した状況」において“タ”形表現が使用可能な例を挙げる。

■ (旅行中、車窓から偶然、羊をみつけて)

- a. あっ、羊がいるよ。
- b. あっ、羊がいたよ。

この状況においては、aでもbでも表現可能である(松田1998)。“タ”形表現が使用可能となる発話背景としては、松田(1998)では、イギリスやニュージーランドを旅行している状況を挙げている。それは「両国は羊の多い国という知識

があり、羊がいても当然であると同時に、旅行者はもしかしたらどこかで羊が見られるかもしれないと期待していることが少なくないからである」。このような発話状況は「潜在的な期待」を有する状況とされている (pp.75-76)。この場合、「事態把握の観点に関わる条件」の働きによって“タ”形が用いられると、本稿は考えている。この点については、24節で論じる。

- 14) ただし、「あそこに」というフレーズを加えると(18b)も発話可能になる。それは「あそこに」というフレーズにより、眼前の状況を描写することに表現の力点が移っているからである。

■ (旅行中、ガイドブックに載っていた店を探していて、見つけたときに)

- a. あそこにあった!  
b. あそこにある!

- 15) この発話状況は、脚注13で取り上げた、(潜在的な期待を有する)偶然の発見の場合である。
- 16) 眼前のことを描写する際、“ル”形で表現するのは当然のことである。それは、「見つける時点」が〈発話時現在〉にあり、「へそくりが眼前にある」ことに表現の力点が置かれているからである。
- 17) もちろん、この場合に用いられる“ル”形表現も「事前の想定の見直し」という表現効果を有する。
- 18) もちろん、この場合に用いられる“ル”形表現も「事前の想定の見直し」という表現効果を有する。
- 19) 例えば、試験の後、自己採点でかなり出来がよかった状況である。この場合は、「自分の受験番号が掲示板にある」という事態を自己採点を通して間接に認識している状況である。
- 20) 例22では、乙が「あるよ。こうすればいい」と“ル”形で答えると、聞かれた時点ですでにわかっているというような発話になり、自分が知っている方法の中にあるという意を表している。

#### 参考文献

- 井上 優 (2001) 「現代日本語の「タ」」、『「た」の言語学』、つくば言語文化フォーラム
- 井上 優・生越直樹・木村英樹 (2002) 「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語」、生越直樹編『シリーズ言語科学4 対照言語学』、東京大学出版会
- 岩崎 卓 (2000) 「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」、『日本語学』19-5、明治書院

- 金水 敏 (1998) 「いわゆる ‘ムード’ の「タ」について—状態性との関連性から—」、  
『東京大学国語研究室創設百周年国語研究論集』、汲古書院
- \_\_\_\_\_ (2000) 「時の表現」、金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法2 時・  
否定と取りたて』、岩波書店
- 尾上圭介 (1982) 「現代語のテンスとアスペクト」、『日本語学』1-2、明治書院
- 岡野ひさの (1999) 「判明を表すタの用法」、『日本語教育』102号
- 定延利之 (2001) 「情報のアクセスポイント」、『月刊言語』30-13
- \_\_\_\_\_ (2004) 「ムードの「た」の過去性」、『国際文化学研究』第21号、神戸大学国  
際文化学部
- 徐 雨棠 (2007) 「事態把握と“了”と“タ”」、第10回中日理論言語学研究会レジュ  
メ
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能」、『言語学と日本語問題』、くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』、くろしお出版
- 松田文字 (1998) 「眼前事態描写における「タ」の機能——過去時への廻りを要請する  
「タ」——」、『日本語教育』97号
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み』、刀江書院、〔くろしお出版から復  
刊〕

<キーワード>文末の“タ”、テンス、話者の事態把握

## *Discovery expressed by “-ta”*

Yufen XU

The usage of “-ta” form in the expressions of discovery depends either on the tense of the sentence or on construal. Interdependence of the tense of the sentence and the usage of “-ta” form in the expressions of discovery is as follows: “-ta” is used when the speaker is talking about a circumstance and has some previously acquired knowledge or experience concerning that circumstance. The interconnection of the construal and the “-ta” form in the expressions of discovery is as follows: “-ta” is used when the speaker realizes that his hypothesis or expectation concerning some circumstance is correct. The sense of discovery appears when the speaker realizes that his hypothesis or expectation is correct and through this understanding he updates his default knowledge or experience concerning the circumstance. In this case, the precondition for using “-ta” is that the speaker must have a following anticipation: “probably something is somewhere”.